

筑波大学 CEGLOC FD 委員会 —2021 年度年間報告—

CEGLOC FD 委員会

FD 委員会のロゴは、CEGLOC で開講されている 9 つの言語（中国語、英語、フランス語、ドイツ語、朝鮮語、日本語、国語、ロシア語、スペイン語）を表している。

CEGLOC FD 委員会のミッション

CEGLOC FD 委員会は教職員が (1) 教育において直面する課題に対処するための教育や教授法の実践および (2) 各自の研究という課題に関して協力し合い、トレーニングを受けるための多言語による討論の場を提供し専門的成長を促すことを目指している。

CEGLOC FD 委員会のビジョン

1. ミニ・カンファレンス：学問及び教授法において教職員を支援するためにワークショップやラウンドテーブル、セミナー、講演などを開催する。
2. 新任教職員に対するオリエンテーション：大学の組織や慣例を理解するための説明会を開催する。
3. 教職員の学習コミュニティ：同じ関心を持つ研究者同士による共同研究のための組織づくりを促進する。

2021 年度における FD 委員会の役職

- | | |
|-----------|-------------------------------------------------------------|
| A) 委員長 | ヴァンバーレン ルート |
| B) 副委員長 | チョーハン アヌブティ |
| C) 書記 | ヤマダ ナオミ（2021 年 9 月末まで）
チョーハン アヌブティ（2021 年 10 月から） |
| D) 会計係 | イスマイロフ ムロド |
| E) 編集係 | ジャクタ ブルノ、磐崎弘貞、今田水穂、
チョーハン アヌブティ、
波多野博顕（2021 年 10 月から） |
| G) アンケート係 | 編集係 |
| H) 宣伝係 | ルーデ マルクス、ポワレ ラファエル |

2021 年度における FD のイベント

- 第 1 回：第 3 回外国人研究者のための科研費セミナー
- 第 2 回：オンライン・ティーチングに関するワークショップーヒントと経験の共有ー

本報告の英語版は『外国語論集』第44号に掲載されている。

CEGLOCでFDに関するイベントを計画されている方に対して、FD委員会は企画及び財政面で支援を行う。詳細は、以下のメールアドレスに問い合わせられたい：
ceglocfdcommitteeevents@gmail.com

—2021年度第1回FDイベント—

タイトル：第3回 外国人研究者のための科研費セミナー

開催日：2021年7月6日（火）10:10-11:40

会場：ハイフレックス・ミーティング（大学会館特別会議室およびZoom）

主催：グローバルコミュニケーション教育センター FD委員会

共催：URA、人文社会系

概要

7月6日、CEGLOC FD委員会はURAと人文社会系の協力を得て第3回外国人のための科研費セミナーを開催した。このセミナーは、参加者が会場に来るかZoomで参加するかを選択できるハイフレックス型のイベントで、JSPS科研費助成金申請書の作成に関心のある全ての教員および研究者を対象とした。

プログラム

10:10-10:15 開会挨拶 チョーハン アヌプティ助教（CEGLOC FD委員会副委員長）

10:15-10:35 「効果的な助成金提案のための2つの「未知」の管理」(Managing the two 'unknowns' for effective grant proposal: Lessons learnt from successful applications) イスマイロフ ムロド助教（人文社会系、CEGLOC）

10:40-11:00 「科研費への応募に関する個人的考察」(Some personal reflections on applying for Kakenhi) モリス ジェームズ ハリー助教（人文社会系、CEGLOC）

11:05-11:25 「科研費応募戦略とURAからの注意事項」(Kakenhi application strategy and attention points from URA) 陳晨リサーチ・アドミニストレーター（URA本部）

11:25-11:40 一般質疑、雑談、閉会挨拶 ヴァンバーレン ルート准教授（CEGLOC FD委員会委員長）

セッション1の活動内容

最初に登壇したイスマイロフ ムロド助教は「2つの未知」に焦点を当てて科研費への応募の経緯を説明した。第1の未知は申請者の条件、第2の未知は審査環境である。この2つの未知をどのように管理するかについて、最も重要なことにエネルギーを集中させ、「少ないがより良い」ことを強調することが効果的な戦略だとアドバイスした。

次に、4つの重要な課題と、その課題に対する解決策を説明した。第1の課題は「自分のテーマが「研究可能」であり、新規性があり、重要であることを自分自身やJSPSの審査員にどうやって納得させるか」である。登壇者のアドバイスは、まず、審査員の視点からトピックを考え、それを簡単な言葉で説明すること、次に、自分がどれだけトピックを理解しているかを示すことだった。第2の課題は「申請書の限られたスペースの中で重要なことを全て簡潔に提示するにはどうしたらよいか」である。ここで強調されたのは、完全な文献レビューをする必要はなく、「規則」というものもないが、ポイントはこれまでの研究に存在する重要なギャップを強調することだということだった。またスペースを省略するための戦略として図表を効果的に使うことをあげ、これは査読者の注意を引くことができるという利点もあると述べた。第3の課題は「少し狭すぎたり複雑すぎたりする研究を効果的に紹介するにはどうするか」である。ここで登壇者は「簡潔」は「単純化」を意味しないことを強調し、項目に分けること、アンダーラインを引くこと、キーアイデアを視覚的に説明することを提案した。第4の課題は「自分がそのプロジェクトを担当するのに十分な能力があると審査員に思わせるにはどうするか」である。可能な解決策として、(1) 方法論と実施計画を明確に示すこと、(2) 現実的で具体的な実施例を示すこと、(3) 自分に経験がないと感じる場合は共同研究者を招くこと、(4) 過去の研究や実験に関する情報を盛り込み、自分の経験の証拠を示すこと、の4つのポイントを強調した。最後に、査読者の注意を引くためには、応募者は査読者にしっかりと内容を理解してもらう必要があることを再度強調して講演を締めくくった。

セッション2の活動内容

続いて、モリス ジェームズ ハリー助教が科研費への応募時の経験をもとに成功する応募書類の書き方についてアドバイスした。彼は自身の研究テーマを簡単に紹介したあと、自分がすでにそれについて出版している独自のテーマを選ぶこと、余裕を持って申請書を完成させること、豊富な参考文献を記載し、審査員が読みやすいように箇条書きにすること、野心的だが管理可能な目標を設定することの重要性を強調した。

次に、応募者全員が考慮すべき5つの点について話した。第1は科研費を取得するためのインセンティブである。大学から期待されていることや履歴書での見栄えが良いなど、さまざまなインセンティブが考えられるが、それよりもプロジェクトの内容に対する個人的な興味及びコミットメントが重要である。第2にプロジェクトに費やす時間である。研究者がプロジェクトに費やす時間は10～15%だが、そのうち20～40%はプロジェクトの管理に関連していることを忘れてはならない。これは科研費を受け取った後の持続可能性、およびプロジェクトへの熱意を維持しながら管理業務をこなす必要性という第3のポイントとも関連する。また、これは申請書で設定した目標の達成という第4のポイントとも関連しており、管理可能な目標を設定して申請書を作成することが重要なステップとなる。第5に、予算に関する問題について話した。大学側は、より多

くの予算を獲得するために予算を最大限に活用することを期待しているが、予算が増えると事務処理が増えることも考慮しなければならない。最後に、研究者の情熱、テーマの独自性、管理可能な目標、そして早めに申請書を作成することの重要性を強調して話を締めくくった。

セッション3の活動内容

3人目の講演者である陳晨氏（筑波大学 URA、リサーチ・アドミニストレーター）は、科研費のカテゴリーの種類、ピアレビューのプロセス、戦略と注意点、およびURAのサポートについて説明した。

カテゴリーの概要を説明しながら、応募者の経歴にあったカテゴリーの選び方をアドバイスした。さらに、より高いレベルの科研費にどうやって応募するかなど、よくある質問にも回答した。

次に、新たな審査カテゴリーとして基盤 (B)(C) および若手研究の「小区分」、基盤 (A) および挑戦的研究の「中区分」、基盤 (S) の「大区分」を紹介し、区分が広がることで、より幅広い審査者が選ばれることに言及した。続いて審査プロセスについて、「小区分」では2段階の書類審査を行い、「中区分」では書類審査の後に、より広い視点からの議論が行われることを説明した。前者は4～6人、後者は6～8人の審査者が参加する。書類審査の基準は(1) 研究課題の学術的重要性、(2) 研究方法の妥当性、(3) 研究遂行能力や研究環境の適切性などであり、4段階で評価される。

戦略的なアドバイスとして、(1) 審査者に向けて書く、(2) 関連するデータや方法などを具体的に書く、(3) 簡潔に書く、(4) 成功した事例に言及することがあげられた。最後に、URAが提供するサポートと関連情報へのアクセス方法を紹介し、講演を締めくくった。

最後に

セミナーには43名（会場出席者13名、Zoomでの参加者30名）が参加し、そのうち29名がアンケートに回答した。参加者の多くは教育関係者や研究者で、約30%がURAのスタッフや大学院生だった。参加者の約76～78%がプレゼンテーションに全体的に満足しており、このようなイベントを同僚に勧めたいと回答した。

また、アンケートではプレゼンテーションの内容やハイフレックス形式を使用したことについて、圧倒的によい評価を得た。ただし、発表時間がやや短かったことや、技術的な問題が生じたとの意見もあった。また、参加者からは国内外の他の助成金の探し方や、ライティングスキルや図表の作成などの技術的な面でのワークショップ、オンラインでの申請方法などのトピックについても提案があった。

—2021 年度 第 2 回 FD イベント—

タイトル: オンライン・ティーチングに関するワークショップ—ヒントと経験の共有—

開催日: 2021 年 12 月 6 日 (月) 9:30-11:05

会場: オンライン (Zoom)

主催: グローバルコミュニケーション教育センター FD 委員会

概要

人文社会科学研究所の 4 名の発表者が、オンライン授業で解決可能な残された課題に取り組んだ。このワークショップでは、同期型授業に焦点を当て、オンライン教育ツールの使い方のヒントを提供した。発表者と参加者はそれぞれの経験を共有した。

プログラム

9:30-9:50 「Manaba: Manaba のメリットと限界」 ジャクタ ブルノ助教 (人文社会系、CEGLOC)

9:55-10:15 「Mentimeter: 学生のエンゲージメントを高める Mentimeter の使い方」 イスマイロフ ムロド助教 (人文社会系、CEGLOC)

10:20-10:40 「Zoom: インタラクティブな雰囲気を作るためのヒント」 ルーデ マルクス (人文社会系、CEGLOC)

10:45-11:05 「経験の共有: 参加者の専門知識、関心、成功例の共有」 ヴァンバーレン ルート准教授 (人文社会系、CEGLOC)

セッション 1 の活動内容

講演者は、manaba のインターフェースの概要を説明した後、参照しやすいように各クラスのアイコンを使用すること、クラスの教育資源を保存すること、クラスのカレンダーを共有すること、課題を与えること、テストを行うことなど、実用的なヒントを共有した。また、manaba を使ったアンケート調査の方法も紹介した。

セッション 2 の活動内容

講演者は、インタラクティブなプレゼンテーションアプリ「Mentimeter」がオンライン学習環境を向上させ、対面式の学習環境をある程度再現したり、改善したりできることを紹介した。このアプリが、学生を沈黙させず全員を巻き込むことで、オンラインでの議論を強化するのに有効であることが示された。

セッション 3 の活動内容

講演者はまず、参加者を別々のブレイクアウトルームに招き、ネット上のどんな問題

に直面し、どのように対処しているのかを自由に話してもらった。その後、メインルームでは、各グループが話した内容を報告し、参加者全体でウェブカメラの使い方、グループワーク、学生の動機付けなどの経験を共有した。

セッション4の活動内容

直前のセッションの議論を引き継ぎ、さらにオンラインでの共同作業やハイブリッドクラスの編成などのヒントを共有した。このセッションは10分延長し、質問やコメントを受けた。

最後に

今回のセミナーには18名の方が参加し、そのうち13名がアンケートに回答した。参加者の多くは、プレゼンテーションに全体的に満足し、内容が有益であったと回答した。「新しい機能を学ぶことができた」「授業を改善するために非常に役立つ情報だった」「情報を共有するためのさまざまな方法を考えさせられた」「プレゼンテーションが非常にわかりやすかった」「この形式が楽しかった」などのコメントは、参加者が内容に満足していることを示している。参加者の多くから、このようなワークショップをもっと開催する必要があるという意見が寄せられた。ハイブリッド教育、学習をインタラクティブにする方法、教室でのテクノロジーの使用、教員間でリソースを共有する方法などのトピックが提案された。また、各セッションにもっと時間を割り当てることや、発表者が使用したスライドやその他の資料を共有することなど、イベントを改善するための有益な提案も得られた。

CEGLOC FD 委員会を代表して

編集・アンケートコーディネーター